

# 明治初期「バンク・ヲフ・ジャッパン」と「三井組銀行」紙幣 関口かをり

## 1 はじめに 明治初期の貨幣制度の検討

明治新政府は1871年5月(旧暦、以下同じ)に「円」(圓)を単位とする新しい貨幣制度「新貨条例」を公布した。その前年より造幣寮では「円」単位の金属貨幣の製造が開始されていた。政府は既に「両」単位の紙幣・太政官札を発行し、政府が設立させた各為替会社は為替会社紙幣を発行していた。「円」単位の政府紙幣の発行も考えてはいたが、一方で銀行を認可し正貨準備による紙幣(証券)発行をさせることも検討していた。

1871年1月、大隈重信と井上馨はアメリカに出張中の伊藤博文に書簡を送り、「三井ノ如ク大家ニバンクヲフジャッパントナシ」\*1、1円以上の新紙幣は、新貨条例により製造・発行される新貨幣を引き換え準備として新銀行に発行させることを構想した。このことは『日本銀行百年史』\*2などでも紹介されている。展示でも紹介した通り、この後、吉田清成と伊藤博文の銀行論争の後、アメリカのナショナル・バンク制度に倣った国立銀行制度が採用されることになり、「バンクヲフジャッパン」構想や三井組による紙幣発行のできる銀行の設立は消えることとなるが、ここでは幻となった「三井組銀行」の紙幣について紹介したい。

## 2 三井組による「新貨幣銀行設立願書」

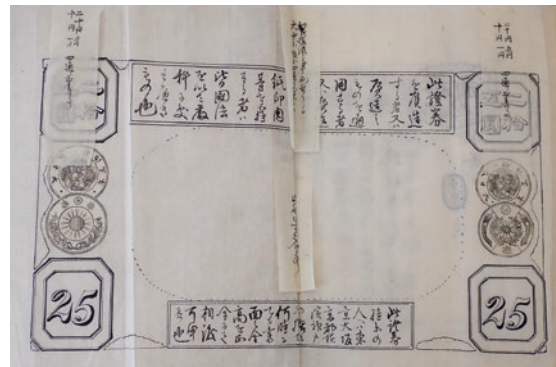
1871年7月、三井組(三井八郎右衛門名代、三野村利左衛門)は、新旧貨幣の交換業務を開始し、一方で独自の紙幣を発行する銀行設立願書を政府に提出した。\*3

三井には大蔵省に提出した願書の写し「上 新貨幣銀行願書」(『大蔵省願何書写入』に綴込み)が遺されている。その最後には、「…就ては銀行必要の真貨兌換の証券を製造いたし、便宜発行候様仕度候間、何卒御允可被成下置度、依て証券注文負数并、発行手続証券雛形等相添奉願上候候以上、明治四年辛未七月日、御為替座、三井惣頭 八郎右衛門名代、三野村利左衛門 印」とある。

そしてその上部には大蔵省からの付け紙が貼付され、「書面願之趣聞届候金券之儀は当省ヨリ米国滞留之官員江申達建回国おみて製造方為取計成功到着之上相渡遣候事、辛未八月」と、願いを聞き入れ、また紙幣は大蔵省で調達・製造したものを渡すことが記されて、「大蔵省」の割印が押されている。

## 3 「三井組銀行」紙幣の構想

『大蔵省願何書写入』には、新貨幣銀行願書に続き紙幣の両面の雛形の図が綴り混まれている。雛形に続く資料「正金兌換証券雛形註譯」と併せてみていく。大枠の構成としては、後に発行される国立銀行紙幣と共通する部分が多く、つまりアメリカのナショナル・バンク紙幣と似通っている。続いて綴られている「証券製造注文高調書」でアメリカに製造を発注することを想定しており、ナショナル・バンク紙幣を参照しているとも考えられる。



「三井組銀行」紙幣 雛形 裏  
公益財団法人 三井文庫 蔵

「二拾五圓」の雛形ではあるが、二十円、十円、五円、一円の四種類の発行が考えられていた。表面の文言は、本頁に書き起こした。裏面には、上部に偽造防止文言があり、左右中央にそれぞれ表裏2枚の図柄(「正金兌換証券雛形註譯」によると「金銀新貨幣の真形」、下部にこの証券を持参した人には「東京・大坂・京都・横浜・神戸」の店でいつでも、書面の正金を渡すという兌換文言が書かれている。

この後間もなく発行された最初の政府の円単位の紙幣「大蔵省兌換証券」は、藩札の仕様を引き継いだ縦型であったが、「三井組銀行」の紙幣は横長の西洋式の紙幣で、サイズは高額2種が横19センチ×縦9センチ、残りの2種は横18センチ×縦8センチが想定されていた。

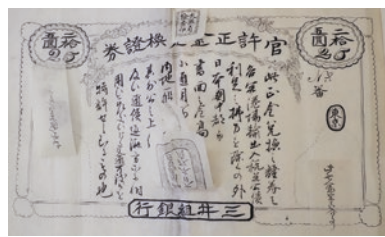
表面の「人物写真」は肖像画を2枚入れる予定で、「正金兌換証券雛形註譯」からそれらは、三井高福(当時の当主、三井八郎右衛門)、三井高朗(三井次郎右衛門)の姿の彫刻が入る予定であったことがわかる。その上の「東京」の文字は小形印で、その他、京都・大坂・横浜・神戸の印が押される想定であった。

また裏面の中央には「東京の景色、最上の地ヲ四ヶ処写生」し、「其中に元方総裁の者両三人の写真」を入れ、4種類とも模様を替えることが書かれている。

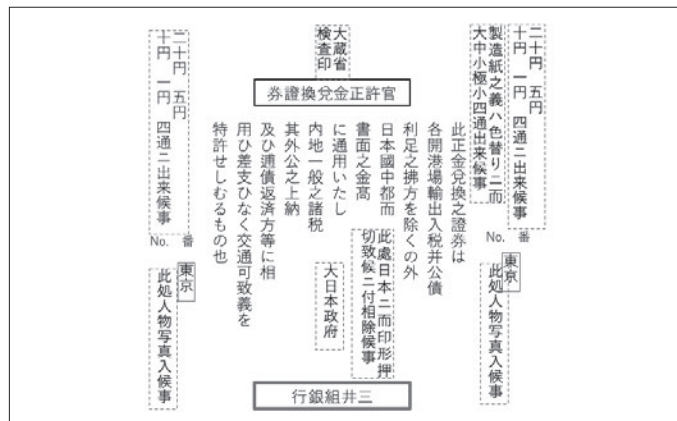
「証券製造注文高調書」には各券種の製造額の案が書かれ、4券種総計で300万円となっている。原版彫刻料、原紙料などが書かれ、メキシコドル(銀)での支払いを換算している。

「証券発行手続概略」には、「此証券ハ、英国政府之銀行バンクオフエングランド発行之法に倣ひ、内地一般之諸税公之上納物、其外借貸商売共、交通候様、御允可被成下度候事」とあり、Bank of Englandの制度に倣い考えられていたことが明らかである。まずは基本的な仕様の構想の紹介に留めたが、今後、本紙幣(証券)案が、明治初期貨幣制度のその後の展開において、どのような影響を与えたかなどについて検討したい。

\*1 「一八五 井上馨等書簡」『大隈重信関係文書 第一巻』日本史籍協会、1932年  
\*2 『日本銀行百年史 第一巻』日本銀行、1982年。  
\*3 「上 新貨幣銀行願書」など(追1625『大蔵省願何書写入』)公益財団法人三井文庫。一連の史料の一部は、『明治財政史 第12巻通貨、銀行』(明治財政史編纂会編、1905年)、『渋沢栄一伝記資料』第3巻(竜門社、1955年)にも所収。



「三井組銀行」紙幣 雛形 表  
公益財団法人 三井文庫 蔵



# 旧様式国立銀行紙幣 5 円券に描かれた日本橋の図柄について 大西 舞

## 1 はじめに

旧様式国立銀行紙幣5円券の裏に描かれた「日本橋皇城櫓および富士遠望」の図柄(図版1)は、江戸時代の日本橋のイメージの定番ともいえる構図となっている。中央に描かれた日本橋川にかかる太鼓橋を大きく手前に描き、兩岸には蔵が整然とシンメトリーに立ち並んでいる。また、日本橋上の高い視点から全体を捉え、遠近法を用いて画面奥に皇居(江戸城)と富士山を描いている。高札場(画面左下)の詳細な描写は江戸後期以降の日本橋周辺を描いた絵画にみられる。この図柄については、すでに伝安田雷洲画「日本橋図」やエメ・アンペール(Aimé Humbert)著『日本図絵』(Le Japon Illustré)掲載の「日本の橋」(Le Pont du Nippon)と構図が酷似していることが指摘されている\*1。本稿ではどちらが旧様式国立銀行紙幣5円券裏の下絵として参照された可能性が高いかについて検討する。



図版 1. 旧様式国立銀行紙幣 5 円券

## 2 旧様式国立銀行紙幣の製造と図柄の選定

日本の国立銀行制度は、アメリカのナショナル・バンク(国法銀行)制度に範をとった。1872年11月15日に国立銀行条例が制定され、紙幣の発行が認められた。明治初期に日本で製造された政府紙幣は江戸時代の藩札製造の手法を踏襲しており、偽造券が多いことが問題となっていた。国立銀行条例の制定に先駆けて、大蔵省はアメリカ在留中の通商正中島信行に命じて1871年9月8日に、アメリカのナショナル・バンク紙幣製造の実績のある会社(Continental Bank Note Co. New York)との間に委託製造の契約を締結した\*2。国立銀行紙幣はナショナル・バンク紙幣と同じ寸法・色彩・様式で製造され、建国にまつわる古い絵画が採用されたこともあって大変良く似た紙幣となった。

事前に複数の写真等が下絵としてアメリカに送られていたが、粗雑であるとし歴史上の英雄豪傑の図の再送が求められた。そのため画工に命じて「蒙古襲来覆没」や「楠公迎撃の図」のほか6,7枚の古画を模写させて、アメリカに送付したとされている\*3。参考にされたアメリカのナショナル・バンク紙幣裏の楕円形窓部分には、南北戦争により荒廃したアメリカの再興を意識した図柄として、アメリカ建国の歴史的場面や当時の英雄が選ばれていた。1860年代のナショナル・バンク紙幣裏の図柄は10ドルに「デソトがミシシッピ川を発見した場面」(p.19)、20ドルに「ポカホンタスの洗礼」などが銅版画で描かれている。いずれもアメリカ議事堂の円形ドーム下の広間を飾る油彩画から選ばれたものである。

## 3 挿絵「日本の橋」(図版 2) について

「日本の橋」は1870年にパリのアシェット社より出版された『日本図絵』の下巻に収められた挿絵である。スイス人のエメ・アンペールは遣日使節団長として日本と修好通商条約を結ぶため1863年長崎に来航した。アンペールは条約の調印が行われるまでの約



図版 2. 日本の橋  
Le Japon Illustré 2 (『日本図絵』エメ・アンペール) 1870年 九州大学附属図書館 蔵

10か月間に日本の様子を詳細に調べ、関連する絵画や書籍などを多く蒐集しスイスへ持ち帰った\*4。アンペールの滞在記は挿絵入りで週刊誌『世界一周』(Le Tour du Monde)に掲載され、その後1870年に内容を拡充して『日本図絵』として出版されたものである。「日本の橋」は日

本の絵画を元にペルロックが挿絵用に描いたものであるが、その下絵とされた日本の絵画は不明である\*5。近年、チューリッヒ大学民俗博物館が所蔵する3,000点を超えるアンペール・コレクションの調査が進められている。アンペールが日本で収集したコレクションには写真やデッサン、木版画が含まれているという。その中に「日本の橋」の原画にあたる絵画が含まれているのか、明らかにされていない\*6。

## 4 伝安田雷洲画「日本橋図」(図版 3) について

「日本橋図」の作者と伝わる安田雷洲は、19世紀前半に蘭画や銅版画、洋風画などを残した人物である。近年生没年が特定され、1770年頃に生まれ1859年に没したとみられている\*7。版画史研究家・小野忠重は絹本着色の肉筆画「日本橋図」を、安田雷洲の終末期の作品としているが、落款等を欠くため作者の確定は難しい\*8。そのため「日本橋図」の制作年代も特定しがたいが、19世紀前半の作品と考えられている。



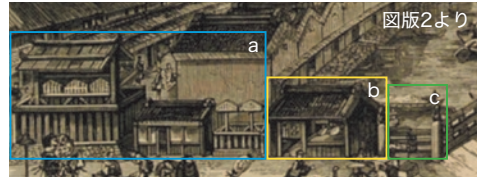
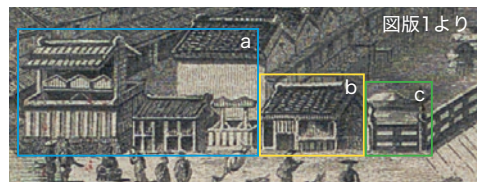
図版 3. 伝安田雷洲画「日本橋図」  
神戸市立博物館 蔵

## 5 細部の比較

図版1~3の細部の描写を比較してみると、(1)日本橋南詰、(2)銭瓶橋、(3)日本橋上、(4)日本橋北詰にいくつかの相違点と共通点が認められる。

### (1) 日本橋南詰の高札場

aの高札場の並びが図版1と2では共通しているが、図版3では一段と背の高い高札場が画面左端ではなく日本橋側に描かれ、さらに図版1と2にはない高札が左端に描かれている。bの建物は図版1と2では屋根のある小屋として描かれているが、図版3では葎をかけた小屋として描かれている。cは図版1と2では橋の袂の2本の欄干の背景に川面が描かれているが、図版3では柵で囲まれて迫り出した形のスペースがある。このスペースは江戸後期の日本橋南詰を描いた絵画や明治時代の写真(図版4)にも見られ、この点では図版3がより実際に近かったものと考えられる。



図版 4. 日本橋南詰  
「東京火災保険」(部分)  
『日本之名勝』1900年 NDL 蔵



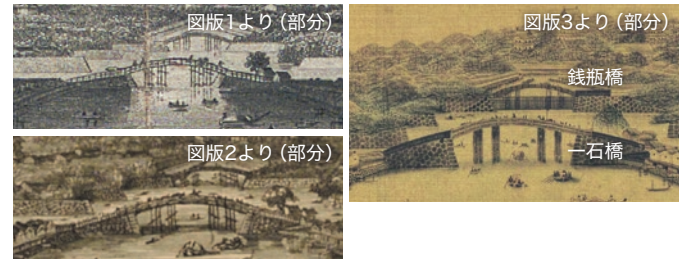
高札場前の通りに描かれた人々に注目すると、図版1と2ではdの竿にかけた荷を担ぐ2人、eの女性とおどけた様な姿勢の子供の向き、fの犬や奥の物売りや客のような2人、gの荷車の描写があること、が共通している。一方図版1にはないがhの被り物をした2人や荷を背負った人、女性3人が連れ立っている描写、iの二人組などが図版2と3に共通している。jの二人組は図版1と2で笠をかぶっているが図版3に笠は描かれていない。またkの大きな魚を運ぶ2人については図版1-3全てにみられる。



図版1は紙幣の裏面の小さな枠の中に描かれたため、図版2や3と比べると高札場前の通りに限らず、人数など描写が省略された部分があると考えられる。それでもなお、高札場とその前の通りの人物の描写から図版2がより図版1に似ているといえる。

## (2) 銭瓶橋

図版1-3の全てにおいて平川（現在の外濠）と日本橋川が分岐する部分にかかる一石橋の奥に、小さく銭瓶橋が描かれている。銭瓶橋に注目すると、図版3のみ橋脚の半分の高さまで柵が描かれているが、図版1と2には見られない。



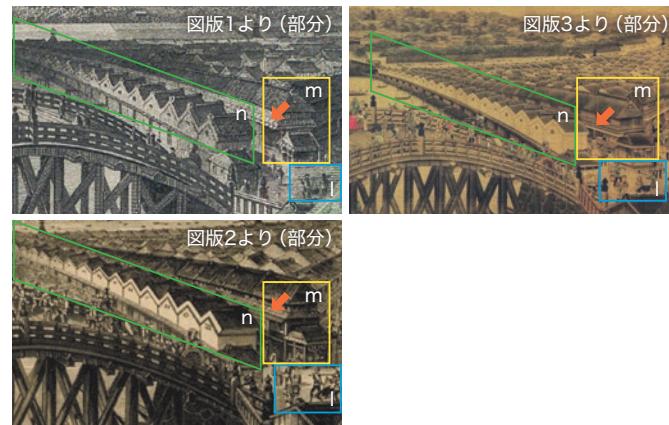
## (3) 日本橋上

日本橋上に描かれた人物や荷車の数や配置は図版2と3ではほぼ一致している。一方、図版1は橋上の人物等の描写が大幅に間引かれたようである。橋上の図版に描かれている人物に注目すると、図版3では長い本差と短い脇差を差した人物が描かれているが、図版1と2では2本の長い打刀を携えているようである。いずれも細かい部分で精細さを欠くが図版3のみ異なっているといえる。なお、橋の欄干の斗東の本数は図版2と3が共通している一方、図版1では橋の中央より右側の斗東が数本多く描かれている。



## (4) 日本橋北詰

橋の袂のlをみると、図版1では籠を提げた2人組のみ、図版2,3では魚を提げた2人組と天秤棒を担ぐ人が描かれている。またmの角の1階建ての建物は、図版1と2において戸板（木製の壁）が全く描かれていないが、図版3では一部に戸板らしきものが描かれている。その並びの2階建ての建物は図版1と2では戸板が向かって左に位置しているのに対し、図版3では右に位置している。



日本橋川の両岸に立ち並ぶ蔵屋敷の数はいずれも図版2と3で共通しているが、図版1のnは奥に行くにつれて遠近法と陰影により不鮮明となり軒数の特定がしがたく若干の相違がある。これは図版1の小さな紙面の都合上、曖昧に表現されざるを得なかったと考えられる。

以上(1)~(4)で見てきた通り、図版1と2に描かれていて図版3に描かれていない人物等があり、図版3に描かれていながら図版1と2には描かれていない柵などがある。また図版1と2では高札場の建物の並びが一致していることなどから、図版1の「日本橋皇城櫓および富士遠望」は図版2の「日本の橋」とより近似しているといえる。

## 6 むすびにかえて

旧様式国立銀行紙幣5円裏に描かれた図版1：「日本橋皇城櫓および富士遠望」の下絵の候補と考えられていた図版2：「日本の橋」(Le Pont du Nippon)と図版3：伝安田雷洲画「日本橋図」と細部を比較すると、より図版2が実際の紙幣との共通点が多いことが分かった。特に日本橋南詰の高札場およびその前の通りの描写が酷似していること、また5円券表の稲刈りと田植えの図 (p.19) も図版2と同じ『日本図絵』の挿絵が下絵とされたことを勘案すると、図版2が下絵とされた可能性が高いと考えられる。一方で、図版2の「日本の橋」は日本の絵画を元に挿絵として描かれたもので、その元となった日本の絵画は不明である。その日本の絵画が「日本橋皇城櫓および富士遠望」の直接の下絵となった可能性も現段階では否定できない。この点については、アンペール・コレクションの調査研究の進展とその成果の日本での公開を待ちたい。

- \*1 新福道夫「研究ノート 国立銀行紙幣の原因をめぐって(上)」『お札と切手の博物館ニュース』第13号 お札と切手の博物館 2001年、植村峻「紙幣肖像の近現代」吉川弘文館 2015年
- \*2 明治財政史編纂会編『明治財政史』13 丸善 1905年(284p) など(巻末文献リスト参照)
- \*3 『明治財政史』13 (288-289pp) など(巻末文献リスト参照)
- \*4 エメ・アンペール著・茂森唯士訳『絵で見る幕末日本』講談社 2004年(16-38pp)、高橋邦太郎訳『新異国叢書14 アンペール幕末日本図絵 上』雄松堂書店 1969年(395-399pp)
- \*5 『新異国叢書14 アンペール幕末日本図絵 上』雄松堂書店 1969年(9p)凡例「ペルロック画日本の絵画による(より)」
- \*6 吉田隆「研究の周辺 エメ・アンペール『幕末日本図絵』とその周辺―「日欧文化交流史」展に寄せて―」『神奈川大学評論 第55号』神奈川大学広報委員会 2006年、ヴェロニク・ペランジェ「エメ・アンペールの『絵で見る日本』(1870年)における江戸の都市の表象」『お茶の水女子大学比較日本学研究センター研究年報』お茶の水女子大学比較日本学研究センター 2007年
- \*7 内田洸「安田雷洲の没年及び画業について」『美術史研究』第52冊 早稲田大学美術史学会 2014年
- \*8 小野忠重『江戸の洋画家』三彩社 1968年

## 1 はじめに

日本橋川や隅田川は、今日周遊を楽しめるクルーズ船などが見られ、観光地としても親しまれているが、道路や線路が発達する以前は、重要な物流、交通の道としての役割を担っていた。江戸時代、日本橋川は隅田川の河口部にも近く、利根川・荒川に通じ、関東の各地ともつながっていた。明治時代も河川の役割は変わらず、和船を含め西洋型帆船や蒸気船など、さまざまな船が行き交っていた。ここでは今回展示した錦絵に描かれていた当時の代表的な川蒸気船「通運丸」について、当時の航路と運賃を紹介する。

## 2 川蒸気船 通運丸について

1869年に平民の船舶保有が解禁され、翌1870年商船規則の発布により、西洋型船舶の取得が奨励されるようになる。当初は、輸入された西洋型帆船や蒸気船が導入され、次第に国内製造の船も増加していく。<sup>\*1 \*2</sup>

明治初期、関西の淀川では水害を防ぐことと、舟運路の整備を目的とした護岸工事が行われた。水深が確保できたことで大型の船が往復できるようになり、蒸気船も就航し大いに繁栄した。関東の利根川の舟運路も江戸川筋を中心に、1877年頃から大型船就航のための護岸工事が行われた。また、1890年利根川と江戸川を結ぶ利根運河の竣工により、従来の航路に比べて所要時間も大幅に減少した。<sup>\*3</sup>

こうした整備が進むなか、通運丸は1877年、内国通運会社(日本通運株式会社の前身)が東京・深川扇橋から、栃木・生井村までの航路にて就航させた川蒸気船である。第一通運丸は、石川島平野造船所(現中央区佃島)にて建造された。



手前には通運丸、奥には木造の両国橋が写っている。「両国橋(通運丸)」中央区立郷土天文館「タイムドーム明石」蔵

## 3 通運丸の発着場

通運丸の東京における出発地(原発場)は、もともと深川・扇橋にあり、航路が増えていくにつれ、両国・日本橋蛸殻町・高橋が東京の主な発着場となった。両国は主に利根川上流の目的地へ、ほかに蛸殻町は下利根川、霞ヶ浦、北浦方面へ、高橋は主に東京一行徳間などの発着場となっていた。<sup>\*4</sup> 今回展示した



隅田川周辺の通運丸の出発地(原発場)『図説・川の上の近代―通運丸と関東の川蒸気船交通史―』川蒸気合同展実行委員会 より作成

た錦絵は、両国の発着場を描いたものになる (p44)。通運丸の左端には郵便旗が掲げられている。右端に描かれた建物には内国通運会社の旗が、軒先には行徳や松戸など、各目的地の名前が見える。



「東京両国通運会社 川蒸汽往復盛栄真景之図」右側部分

## 4 目的地への所要時間・運賃

各目的地への運賃はいくらであったか。通運丸の創業時(1877年)の広告から行徳、古河までの航路の運賃を見てみる。東京一行徳20銭(上等)12銭(下等)東京一古河85銭(上等)55銭(下等)<sup>\*5</sup>(1877年、白米10kgの値段は36銭)<sup>\*6</sup>

錦絵の年代と同じ頃の1884年の運賃は以下である。東京一行徳13銭(復路は1銭安い)東京一松戸22銭東京一古河60銭<sup>\*7</sup>当時河川舟運のライバルとなっていたのは、文明開化の象徴である1872年に開通した鉄道であった。しかし、敷設に莫大な金額がかかる鉄道よりも、民間で出資して川の修築工事ができる舟運がこの頃盛り上がりを見せていた。<sup>\*8</sup>

ところが1884年に日本鉄道は、上野―高崎間を開通<sup>\*9</sup>、翌年には大宮―宇都宮間を開通させるなど、利根川や各地の舟運の航路と並走する路線を開通させることとなった。舟運業者は運賃の値下げを行うなど対抗したが、次第に鉄道の勢いが舟運を脅かしていくことになる。

1905年の蒸気船運賃は以下になる。東京一行徳8銭東京一松戸12銭東京一古河30銭<sup>\*10</sup>当時の鉄道運賃は1903年で上野―古河61銭である。蒸気船の運賃が鉄道の半額となっており、安価な印象を受けるが、所要時間は蒸気船が17時間に対し、鉄道はわずか2時間であった。<sup>\*11</sup>

鉄道の普及に伴い、舟運は次第に衰退していったが、鉄道より安価で、大量の物資の輸送手段としては引き続き一定の役割を担った。今回展示した錦絵の通運丸を事例に、航路や運賃を見てきたが、当時運航していた蒸気船、航路はさまざまである。日本橋周辺の舟運事情の掘り下げも含め今後の課題としたい。

- \*1 『交通史体系日本史叢書24』山川出版社 1970年
- \*2.8 山本弘文編「交通・運輸の発達と技術革新―歴史的考察(国連大学プロジェクト「日本の経験」シリーズ) 1986年
- \*3 松浦茂樹「わが国における近代の河川交通(1)―利根川、荒川を中心に―」1995年
- \*4.5.7.10.11 『図説・川の上の近代―通運丸と関東の川蒸気船交通史―』川蒸気合同展実行委員会 2007年(\*5.7.10の運賃に関しては図説掲載の新聞記事・広告より)
- \*6 『値段史年表』朝日新聞社 1988年
- \*9 『日本鉄道史上編』鉄道省編 1921年



# 明治前期における日本橋川の橋梁

下田 夏鈴

## 1 はじめに

日本橋川という名称が正式に定められたのは、1883年のことである。その範囲は「京橋区日本橋区境豊海橋ヨリ鰐橋江戸橋日本橋ヲ経テ一石橋ニ至ル川筋」とされた\*1。明治時代の日本橋川には江戸時代からある橋梁（一石橋、日本橋、江戸橋、湊橋、豊海橋）に加え、明治以降に架橋された鰐橋、西河岸橋を合わせた7本の橋梁があった。

明治以前の日本の橋梁形式で最も一般的なのは高欄付板橋と呼ばれる木造桁橋であった\*2。明治時代になると、馬車や路面電車などの登場により、これらの荷重に耐え得る、より頑丈で強固な橋梁が必要となった。そのため、従来の木造桁橋ではなく外国の技術を用いた橋梁が架設されるとともに、材料も木材、石材に加えて鉄が登場するようになる\*3。

日本橋川の橋梁も、時代とともにその姿を変えていった。本稿は明治初期の日本橋川の橋梁について、当時の社会情勢などを踏まえた上で、橋梁の特徴や架橋の背景を整理していきたい。

## 2 新しい交通機関の登場と政府の対応

明治時代になり、文明開化で西洋文化を取り入れていく中で、交通事情も目まぐるしい変化を見せた。1869年には外国人によって東京―横浜間で乗合馬車の運行が始まり、その翌年には和泉要助、鈴木徳治郎、高山幸助らの発案によって人力車の営業が開始された。江戸時代にはなかった陸上交通機関の登場により、道路・橋梁の改良整備が必要となったのである。

1871年4月、太政官は「諸道川々橋梁取建ニ可相成場所モ従来舟渡歩行越等ニテ旅人難渉不少ニ付各地方官ニ於テ水利研究之上早々仮橋相設可申」とし、全国的に橋梁の架設を奨励する旨を布告している\*4。

また、翌年10月には、江戸幕府が禁じていた馬車・荷車について隅田川の四大橋（永代橋・両国橋・新大橋・大川橋（吾妻橋））での通行が許可された。明治政府はこれを「人民ノ便」「運輸ノ利」を拡充するための政策であるとしている\*5。

このように、明治初期には交通や物流の利便向上を目的とした橋梁の新設ないし改良の方針が明治政府により示されていたのである。

## 3 日本橋川の橋梁

冒頭でも述べたように、明治前期の日本橋川には7本の橋梁が架けられており、西河岸橋を除くすべての橋はもともと木橋であった。それらがどのように変化していったのか。木橋・石橋・鉄橋それぞれの代表的な橋を取り上げながらその特徴を見ていきたい。

### ○木橋 日本橋

日本橋は1873年の改架で、それまでの桁橋から西洋式の木造トラス橋になった。方杖トラス橋と呼ばれる構造の橋で、橋脚と橋脚の距離を大きくとることができるという特徴があった。そのため、沿岸に多くの河岸が設けられ、舟運の盛んであった日本橋川に適した構造でもあった\*6。錦絵などを見ると、橋上を往来する人力車や馬車に目が行きがちであるが、構造的観点から見てみると、江戸時代から続く舟運に対応した日本橋の姿を捉えることができる。



方杖トラス橋の日本橋  
この改架時に、車道と歩道が設けられる。橋の中央に車道、その両側に歩道が設けられ、欄干により隔られている。

### ○石橋 江戸橋

江戸橋は1875年に石橋に改架された。当初は西洋式の木橋に架け替えられる予定であったが、東京の中央に位置し、人家が密集している地域であることから火災に強い材質にするのが望ましく、且つ木橋は修繕が必要であり、その浪費を省くために石橋への改架が提言された\*7。

この頃、東京には江戸橋を含め複数の石橋が架設されたが、その多くが旧江戸城の石垣を利用して造られたものだった。その理由について東京府橋梁掛・山城祐之が集議院に宛てた建白書（1873年4月付）に、旧江戸城の石垣は「不用物ニ属シ候姿」になったため、石橋の資材に用いれば「無用物ヲ以テ有用トスル」ことができると記されている\*8。常磐橋、呉服橋、荒布橋、京橋など、旧江戸城周辺の地域において石橋が多く架橋された背景には、旧江戸城に使用されていた建材の利用という事由があった。



旧江戸城の石垣で造られた江戸橋

### ○鉄橋 鰐橋

日本橋川で最初の鉄橋は、1888年に改架された鰐橋である。同年4月7日の『官報』には、鰐橋の工事について詳細に記載されている。この橋はプラットラスという構造で、「費用寡ク且ツ堅牢ナル」ことから採用された。実はこの橋、若干の反りがある。その理由は「両岸ノ地盤低卑ニシテ水平ノ桁構ヲ用ユルトキハ通船ニ不便ヲ与ヘ、橋台ノ高起スルトキハ道路ト橋面ノ間峻険ヲ為シ諸車通行ニ便ナラス。其弧形ヲ為シタルハ止ムヲ得サルニ出タルモノナリ」としている。この記述からは、鰐橋が水陸両方の交通を考慮して造られた橋梁であったことが読み取れる。



横側から見た鰐橋  
橋本体がわずかに反っている様子がわかる。

## 4 おわりに

日本橋川の橋梁は、水陸の交通事情や旧江戸城の建材利用といった背景を踏まえて設計されたものであった。また、本稿では触れなかったが、明治以降には街との調和、つまり景観を重視した橋梁が設計されるようにもなった。それは、近代の金融街として西洋建築が建ち並んだ兜町周辺に石橋、鉄橋が多く架橋されていることや、和洋折衷のデザインを持つ石造アーチ橋 日本橋が改架されたことなどが例として挙げられるだろう。

- \*1 1883年10月5日『官報』
- \*2 五十畑弘・榛澤芳雄「わが国における橋梁建設技術の近代化の方向づけについて」（『土木学会論文集』（536）,1996年）p.70
- \*3 明治初期の東京の鉄橋としては、1870年に皇居内に鉄橋の吊り橋が架けられた他、1871年に新橋が架設された。（伊東孝『東京の橋』鹿島出版会,1986年,p.37）
- \*4 1871年4月23日『太政官日誌』。ちなみに、この布告の翌年である1872年、日本橋川には鰐橋（木橋）が新たに架橋された。ただし、鰐橋の架橋は三井・小野・島田の出資によるもので、この布告と鰐橋の架橋に関連性があるかは定かではない。
- \*5 「四大橋馬車荷車通行ヲ許ス」（『太政類典・第二編・明治四年～明治十年・第七十八巻・運漕四・治水道路四』、国立公文書館）
- \*6 安達實ほか「東日本における木造方杖橋の構造形態について」（『土木史研究』（22）,2002年）p.241
- \*7 「江戸橋外一橋架換ニ付日比谷外ニヶ所見附ノ橋台石取用ノ儀伺」（『公文録・明治七年・第四十一巻・明治七年三月・内務省伺（一）』、国立公文書館）
- \*8 「石橋築架之議」（『上書建白書・建白書（四）』、明治六年四月～明治六年六月』、国立公文書館）

【参考文献】  
東京市日本橋区編『日本橋区史』1916年  
東京都中央区編『中央区史』1958年  
ベルト・ハインリッヒ『橋の文化史 桁からアーチへ』鹿島出版会,1991年  
日本橋梁建設協会『日本の橋（普及版）-鉄・鋼橋のあゆみ-』2012年  
五十畑弘『シリーズ・ニッポン再発見5 日本の橋-その物語・意匠・技術-』ミネルヴァ書房,2016年

# 日本銀行初代本店の地の建物について

-コンドル建築の再利用と日本銀行による増築棟-

関口かをり 下田夏鈴

## 1 はじめに

日本銀行初代本店の建物については、これまでコンドルによる煉瓦造の建物として詳細な分析が行われてきたが、今回、企画展「水辺の風景と日本銀行」で展示した井上安治「永代遠景」にはコンドルの煉瓦造りの右側に描かれた日本銀行の白い建物・営業場（p.27）が描かれている。ここでは現時点で把握できる同敷地内の建物の図面・絵画・写真史資料の整理を行いたい。

日本銀行初代本店は、開業にあたり場所を東京市内各所に探したが、適当な場所がなくやむを得ず、日本橋区北新堀町・箱崎町にあった旧開拓使物産売捌所の建物および土地を大蔵省より借受け、1882年に開業した。その地は東京市の「隅に偏在」し、「中央銀行として適当の地に非らざる」を以て、1883年には中央に新築移転することを決定している。\*1  
開拓使物産売捌所として1881年に竣工した2階建煉瓦造のイギリス人建築家ジョサイア・コンドルによる既存の建物を修繕した後、営業場や金庫を新築している。

## 2 旧開拓使物産売捌所の建築

旧開拓使物産売捌所の建築については、遠藤明久による一連の詳細な研究（1963～1972年、日本建築学会論文報告集など）がある。また日本銀行金融研究所アーカイブ（以後、アーカイブとする）では、同建物のコンドルやその学生による彩色図面を52枚所蔵し（1962年に日本銀行倉庫から発見され、その所蔵経緯は不明。画像はweb公開中）、同図面については、前述の遠藤明久による論考および河東義之編『ジョサイア・コンドル建築図面集』（中央公論美術出版社、1980年）に詳細な分析がある。

そのため、ここでは同建築の説明は割愛するが、今回の展示の「水辺の」建築観点で3点言及しておきたい。まず、「開拓使物産売捌所」開設にあたり、この水辺が選ばれた理由であるが、この建物の「開拓使」の「物産」を扱う目的から、北海道との舟運と東京の倉庫群への利便性からこの地となったと考えられる。第2に基礎構造について、水辺の軟弱な地盤であったことから、それに耐えられるよう「囲杭」をして「いかだ基礎」を組み、そしてコンクリートを打っている。\*2 第3に外観であるが、隅田川・日本橋川の川沿いにあることから、ヴェネツィア風の外観の建築をコンドルは採用したと考えられている。

ヴェネツィア風の煉瓦造り建築は、文明開化の象徴の1つとして東京の名所となり、明治初期の錦絵に描かれた。但し、開拓使の建物として使われたのは1年程度であったため、錦絵は日本銀行の建物として描かれた。また、建物自体を中心に据えている作品は、井上安治「永代橋際日本銀行の雪」（p.27）で、それ以外で現在知られている作品4点（p.27,28,29）はいずれも隅田川にかかる永代橋と共に捉えられている。

## 3 写真からみる初代本店の建物

アーカイブでは初代本店の写真資料を所蔵・web公開している。撮影年代は記されていないが、『開拓使事業報告』『日本銀行沿革史』などの文献資料と照合し年代を検討したい（後掲の年表参照）。

### 図版 A



「日本銀行所要ノ地所建物賃渡ノ件」1882年 国立公文書館蔵



③開拓使物産売捌所と石造庫



石造庫は営業場が建設されるまでに取り壊された。



①基礎工事の様子と氷室（1878年頃か）



②正面から見た開拓使物産売捌所。右に少し見えているのが氷室。

### 図版 B



「日本銀行へ賃渡建物処分ノ件」1883年 国立公文書館蔵



④雪隠の位置から営業場完成以前の写真であることがわかる。（1881年頃か）



⑤本店（左）と増築された営業場（右）。



工事は、後に鹿鳴館の建築に従事する伊集院兼常が請け負った。

図版Aは大蔵省から日本銀行に賃渡しされた1882年8月、図版Bは1883年5月当時の図面である。両図の石造庫・雪隠・営業場に注目して写真資料②～⑤を確認すると、どちらの図面の時期に撮影されたものであるかを分類できる。営業場増築の翌年には、西側に金庫が完成し、図版Bにも金庫の位置・坪数が記されているが、写真資料からは確認できなかった。その後も必要に応じて事務室・倉庫その他設備等の新設・修繕を随時行っていた。『日本銀行沿革史』（十巻、日本銀行、1913年）によると1891年に営業局第3課事務室が3,600円余で新築され、その翌年には石塀が新築された。規模や位置等について記述を欠き断言はできないが、写真⑥に写っているものがこれらに該当する可能性があり、⑥は1892年以降、本店時代末期もしくは本石町へ本店移転後のものであると推測できる。



⑥本店左にある2階建と思われる建物が営業局第3課事務室か。



右端にあるのが石塀。その隣には電灯らしきものが見える。門の位置が②③とは異なっている。

西暦	開拓使物産売捌所の概略	画像No.
1869	7月 開拓使設置。	
1878	2月 最初の地盤調査。 6月 着工。	①
1881	1月 箱崎町に開拓使物産売捌所 竣工。	②③④
1882	2月 開拓使廃止。建物・敷地は大蔵省の管轄。 8月 大蔵省より日本銀行へ建物・敷地の賃渡し。 9月 営業場の工事着工。 10月 日本銀行本店となる。 10月25日 営業場 落成。	②③④ ⑤
1883	3月 金庫竣工。	
1887	2月 地所および建物等の払い下げを受ける。	
1891	8月 営業局第3課事務室新築。	
1892	8月 石造倉庫、平家建3種、石塀新築。	⑥
1896	4月 日本銀行本店、日本橋本石町へ新築移転。箱崎町の建物は永代舎宅として使用。	
1923	9月 関東大震災にて焼失。	

- \*1 「建築事項第一回報告草案」1890年（日本銀行アーカイブ蔵）、『日本銀行沿革史』第十巻（日本銀行,1913年）など。
- \*2 建築工事に使用したコンクリートについて、東京都立図書館所蔵の木子文庫の史料「煉瓦積モルタル・セメント・砂・砂利調査書」（1886年）にも言及がある。



## 資料目録

本企画展で展示した主な貨幣博物館所蔵の資料一覧

資料名	年代	資料番号
宝永小判	1710年	141
江戸及関八州通用金札 徳川幕府 1両	1867年	509290
5円旧金貨（明治4年式）	1871年	1120
太政官札 10両札	1868年	500361
太政官札 5両札	1868年	500362
相模国 神奈川県 為替 金1両	1869年	509384
為替会社紙幣 東京為替会社 1両金札	1869年	500404
為替会社紙幣 東京為替会社 3匁7分5厘銀札	1869年	500405
大蔵省兌換証券 5円証券	1871年	500371
大蔵省兌換証券 1円証券	1871年	500372
古今銀預り証券 10円証券	1871年	500380
新紙幣 1円	1872年	500387
国立銀行紙幣 第一銀行 5円旧紙幣	1873年	500440
国立銀行紙幣 第三銀行 5円旧紙幣	1873年	500449
国立銀行紙幣 第十五銀行 1円新紙幣	1877年	500503
日本銀行券 旧1円券（兌換銀券）	1885年	500779
国法銀行券 10ドル券	1864年	501422
東海道名所図会 六	1797年	905216
江戸名所之絵（俯瞰図）	1803年	902442
大江戸日日三千両繁栄之為市（雪）	1859年	900242
江戸名所四十八景 一石はし夕景	1861年	901579
東都名所日本橋真景并二魚市全図	江戸時代後半	900179
東都名所八ツ見之橋真景	江戸時代後半	901609
東都名所駿河町之図	江戸時代後半	901660
東都日本橋風景（魚河岸）	江戸時代後半	901661
新板浮絵日本橋着市繁昌之図	江戸時代後半	900228
東京都日本橋御高札場之図	1870年	900180
東京自慢名勝八景日本橋の暮雪	1871年	900203
東京第一名所 日本橋御模様替繁栄之図	1873年	901662
東京三十六景日本はしの曙	明治時代前半	900232
東京日本橋ハウス之遠景	明治時代前半	900061
新開名所大坂町商社	1875年	900135
東京開化三十六景 元大坂町為換会社	明治時代前半	901632
海運橋三井組会社図	1872年	900067
海運橋為換座之図	1872年	900069
東京海運橋第一国立銀行の全図并近圓の市中一覽の図	1876年	900062
東京江戸橋之真景	1876年	900075
江戸橋ヨリ鎧橋遠景（ViewofYedobashiandYoroibashi）	1888年	900115
東京名所図会駿河町三ッ井銀行	1879年	900124
東京名所駿河町三井銀行	明治時代前半	900129

資料名	年代	資料番号
永代橋際日本銀行の雪	1880年代	900157
東京土産名勝図会 永代橋日本銀行	1884年	901597
大日本帝國政府日本銀行全景	1896年	900051
日本銀行落成之図	1896年	900054
東京真画名所図解 日本橋	1880年代	901640
東京真画名所図解 駿河町夜景	1880年代	901641
東京真画名所図解 江戸橋之景	1880年代	901642
東京真画名所図解 四日市	1880年代	901643
東京真画名所図解 鍛冶橋遠景	1880年代	901644
東京真画名所図解 京橋	1880年代	901645
東京真画名所図解 永代遠景	1880年代	901646
東京真画名所図解 海運橋	1880年代	901647
東京真画名所図解 鎧橋	1880年代	901648
常盤橋内紙幣寮之図	1880年	900022
古今東京名所（常盤橋御門不二の遠景・常盤橋内印刷局）	1884年	901628
常盤橋	1915年	901581
聖徳太子御開帳 諸職人出迎之図	1875年	900399
日本橋魚がし旧天王祭団扇投之図	1889年	900182
東京名勝尽江戸橋驛通寮之図	明治時代前半	900227
東京開華名所図絵之内 日本橋須賀の神社渡御	明治時代前半	900231
浪華川崎造幣寮河下より望図	1872年	900009
京坂名所図絵大坂河崎造幣寮之図	1885年	900016
創業當時の造幣寮全図明治四年	1941年	900038
改正東京全図	1886年	902519
東京両国通運会社 川蒸汽往復盛栄真景之図	1884年	900260
泰平海世直競漕	明治時代前半	900564



## 主要参考文献

### 図書

日本橋魚会所編『日本橋魚市場沿革紀要』上巻、日本橋魚会所、1889年
日本銀行『日本銀行沿革史』第10巻、日本銀行、1913年
日本銀行調査局編『図録日本の貨幣7（近代幣制の成立）』東洋経済新報社、1973年
日本銀行『日本銀行百年史』第1巻、日本銀行、1982年
東京市日本橋区編『日本橋区史』第1冊、東京市日本橋区、1916年
内国通運株式会社編『内国通運株式会社発達史』内国通運、1918年
東京市商工課『日本橋魚市場ニ関スル調査』東京市商工課、1922年
三井銀行『三井銀行五十年史』三井銀行、1926年
三井銀行八十年史編纂委員会編『三井銀行八十年史』三井銀行、1957年
三井文庫編『史料が語る　三井のあゆみ：越後屋から三井財閥』三井文庫、2015年
明治財政史編纂会編『明治財政史』12・13巻、丸善、1905年
東京株式取引所編『東京株式取引所五十年史』東京株式取引所、1928年
寺部鉄治『銀行発達史』森野書房、1953年
東京都中央区編『中央区史』中、東京都中央区、1958年
小野忠重『江戸の洋画家』三彩社、1968年
エメェ・アンペール著／高橋邦太郎訳『新異国叢書14　アンペール幕末日本図絵　上』雄松堂書店、1969年
エメ・アンペール著／茂森唯士訳『絵で見る幕末日本』講談社、2004年
大蔵省印刷局『大蔵省印刷局百年史』大蔵省印刷局、1974年
大蔵省財政金融研究所財政史室編『大蔵省史　ー明治・大正・昭和ー』第1巻、大蔵財務協会、1998年
塩谷安夫『アメリカ・ドルの歴史』学文社、1975年
藤森照信『日本の建築明治大正昭和3　国家のデザイン』三省堂、1979年
東京都建設局編『東京の橋と景観　改訂版』東京都建設局、1988年
陣内秀信『東京の空間人類学』筑摩書房、1992年
陣内秀信・高村雅彦『水都学I特集　水都ヴェネツィアの再考察』法政大学出版局、2013年
陣内秀信『水都　東京ー地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』筑摩書房、2020年
東京都中央区立京橋図書館編『中央区沿革図集　日本橋篇』東京都中央区立京橋図書館、1995年
植村峻『お札の文化史』NTT出版、1994年
植村峻『紙幣肖像の近現代史』吉川弘文館、2015年
植村峻『贖札の世界史』KADOKAWA、2020年
鈴木理生編著『図説　江戸・東京の川と水辺の事典』柏書房、2003年
鈴木理生『江戸の橋』三省堂、2006年
造幣局のあゆみ編集委員会『造幣局のあゆみ改訂版II』造幣局、2018年
渋沢栄一『渋沢栄一自伝 雨夜譚・青淵回顧録（抄）』KADOKAWA、2020年
粕谷誠『戦前日本のユニバーサルバンク：財閥系銀行と金融市場』名古屋大学出版会、2020年
鎮目雅人編『信用貨幣の生成と展開：近世～現代の歴史実証』慶應義塾大学出版会、2020年
岩橋勝編著『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』晃洋書房、2021年
武田晴人『渋沢栄一　よく集め、よく施された』ミネルヴァ書房、2021年

### 展覧会図録・報告書

東京都江戸東京博物館『近代版画にみる東京ーうつりゆく風景ー』東京都江戸東京博物館、1996年
東京都江戸東京博物館・朝日新聞社編『日本橋ー描かれたランドマークの四〇〇年ー』東京都江戸東京博物館・朝日新聞社、2012年
東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『東京都江戸東京博物館調査報告書　第16集　平成13年度シンポジウム報告　日本橋』東京都・財団法人東京都歴史文化財団・東京都江戸東京博物館、2003年
川蒸気合同展実行委員会編『図説　川の上の近代ー通運丸と関東の川蒸気船交通史ー』川蒸気合同展実行委員会、2007年

### 論文

初田亨「海運橋三井組為替座御用所の建築について」『日本建築学会論文報告集』（253）、日本建築学会、1977年
立脇和夫「大阪造幣局の建設とオリエンタル・バンク」『東南アジア研究年報』（28）、長崎大学東南アジア研究所、1986年
吉田隆「研究の周辺 エメ・アンペール『幕末日本図絵』とその周辺ー「日欧文化交渉史」展に寄せてー」『神奈川大学評論』55、神奈川大学広報委員会、2006年
ベネット・T・マッカラム「中央銀行の将来：米国史からの教訓」『金融研究』29（4）、日本銀行金融研究所、2010年
伊藤裕久「日本橋からみた水都の空間構造ー河岸地と町の関係に注目してー」『都市史研究』3、都市史学会、2016年
菅原健二「江戸の舟運と河岸：魚河岸・日本橋から築地へ」『地図情報』36（3）、地図情報センター、2016年
谷弘「江戸の町は船で造られ船で発展したー徳川三代の江戸湊整備と生活物資の輸送ー」『海事交通研究』68、山縣記念財団、2019年
木村裕樹「『左官職祖神縁起由来』についてー近代東京の左官組合における職祖の創出ー」『立命館文學』（672）、立命館大学人文学会、2021年
鎮目雅人「渋沢栄一と国立銀行：近代日本の経済発展を支えた金融インフラ」『月刊資本市場』（429）、資本市場研究会、2021年
紅林章央「浮世絵を彩った橋（第2回）江戸橋・海運橋・荒布橋」『橋梁と基礎』56（2）、建設図書、2022年

### 英文

Hepburn, A. Barton. A History of Currency in the United States: With a Brief Description of the Currency Systems of All Commercial Nations: the Macmillan Co., 1915.
Elwell, Craig K. “Brief History of the Gold Standard in the United States.” CRS Report for Congress 7-5700. R41887: Congressional Research Service, 2011.
Annual Report of the Comptroller of the Currency to the Second Session of the Forty-Seventh Congress of the United States: Government Printing Office, 1882, http://fraser.stlouisfed.org/（Digitized for FRASER by Federal Reserve Bank of St. Louis）.

### その他

渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』渋沢栄一伝記資料刊行会（公益財団法人　渋沢栄一記念財団 HP 掲載 https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/)

## 協力者一覧

本展の開催にあたり、ご助言・ご協力をいただきました関係者に厚く御礼申し上げます。

（50音順、敬称略）

粕谷　誠
陣内　秀信
武田　晴人
伊藤公資料館
鹿児島県立図書館
神奈川県立歴史博物館
九州大学附属図書館
慶應義塾図書館
公益財団法人 三井文庫
神戸市立博物館
国立国会図書館
JPX（株式会社日本取引所グループ）
中央区立郷土天文館
東京大学 明治新聞雑誌文庫
東京都立中央図書館
独立行政法人 国立公文書館
長崎大学附属図書館
放送大学附属図書館
早稲田大学図書館

Architect of the Capitol
Los Angeles Public Library



日本銀行金融研究所貨幣博物館  
にちぎん140周年企画展  
「水辺の風景と日本銀行 ー日本橋川と中央銀行誕生までのあゆみー」

日本銀行金融研究所貨幣博物館 Currency Museum, Institute for Monetary and Economic Studies, Bank of Japan  
103-0021 東京都中央区日本橋本石町1-3-1

発行日 2022年9月15日

編集・企画 関口かをり・大西舞・松原早希・下田夏鈴





日 本 銀 行 金 融 研 究 所

# 貨 幣 博 物 館

C U R R E N C Y M U S E U M